

長野県における製鉄遺物の分布について

—東北信地方を中心に—

野 原 建 一

(1)

この小稿はひとつの試論である。ときに大胆な仮説をこころみている。ずいぶん乱暴な議論と思われるかもしれない。が、しかし、これは「試論」である、という言葉にあまえて、以下、長野県における古代から中世にかけての製鉄遺物についてのべていこうと思う。

ところでいうまでもなく、古代から中世にかけての製鉄遺物、といえば、本来、考古学が対象とする研究分野である。それに暗い筆者が、この問題をあえて取りあげたのはつぎの理由による。

ひとつは、近年、製鉄遺跡の調査が全国的規模でさまざまな人びとによってすすめられ、その調査報告がさかんにおこなわれてい、筆者もまたその刺激を受けたことによる。いまひとつは、大学がおかれている長野県では、いったいどれほどの製鉄遺跡があるのか、というまことに素朴な疑問である。もっとも、この疑問をひきおこしたきっかけは、今年(1982年)の4月、南佐久郡佐久町の大日向で産業考古学会鉾山金属分科会主催の鉄山見学会に参加させてもらってからである。⁽¹⁾

そして、その見学を通じてはじめて、近世後期ごろから長野県下においても「たたら製鉄業」が稼業していたことを知ったのである。なるほど大日向の山々は、磁鉄鉱にかぎらずさまざまな鉾石の宝庫のようである。すぐれた磁鉄鉱があればそれを用いて製鉄があってもおかしくはない。砂鉄を原料に稼業していた中国山脈ぞいのたたら製鉄業はよく知っている。また、鉄鉾石を用いた製鉄が岩手県地方で近世後期におこなわれていたことも聞いている。しかし、長野県については不明であった。そこで製鉄をいとなむ可能性が近世以前からあったのかどうか、それを確認したくなったのである。そこで県下の大体の見取図のようなものを得たいと考え、この小稿をもとうと思いついたの

である。いうなれば長野県における「たたら製鉄」以前の製鉄像を頭のなかで素描してみたい、そう考えたのである。以上が本小稿の動機である。

注

(1) 岡田広吉「大日向鉄山」(「研究・業績発表講演会講演要旨集」1982年)大日向鉄山の歴史が簡潔にまとめられている。他に、北野進「南佐久製鉄所遺跡」(「信濃毎日新聞」1982年5月12日付) 島山次郎「実説大日向村」郷土出版社1982年がある。

(2)

さて、この小稿が題する「製鉄遺物」とは、古代から中世初期にかけて生産され、今日にまで遺された製鉄品のことである。古代とはいっても、ここでは弥生時代後期から古墳時代、そして、奈良時代へとつづく。とりわけ、古墳時代の古墳は古代の巨大な墳墓の遺跡である。その墳墓のなか、あるいはその周辺の住居集落の遺跡のなかから発見されたものが遺物である。そして、この遺物のなかに鉄製品とみられるものが、遺跡を発掘調査した人びとの報告書に記載されているのである。

このような鉄製品あるいは鉄器の使用および生産は、わが国では弥生時代にさかのぼれるという⁽¹⁾。しかし、そのほとんどは朝鮮からの舶載品で、国産の製鉄は、弥生時代後期から古墳時代にかけての時期からはじまったと考えられている⁽²⁾。同時に、古代の鉄器に関する研究は、地理的諸条件を勘案して、もっぱら関西以西の九州をふくめた西日本がそのおもな対象であった。すなわち、鉄器は、青銅器文化の圏域にあったといえる。

そのことは、墳墓の副葬品として、また祭祀の道具のみにとどまらず、製鉄の様子をその副葬品からうかがうことができるのである。その意味で、古墳から出土した鉄製品は、その古墳の周辺で生産されたかどうかも含めて十分検討の余地がある

ように思える。潮見浩氏はその点についてつぎのようにのべている。すなわち「古墳のなかに多量の鉄器や鉄錠の副葬される背後には、鉄生産の飛躍的な発展を前提とすべきものがある」⁽³⁾と。したがって、古墳時代の鉄製品遺物の分布を知ることとも製鉄遺跡との関連から大いに意義があるものと思われる。

そして、近年、製鉄遺構や遺物に対する関心が高まりはじめた。関心の高まりは、遺跡発掘調査報告書の多くに製鉄の記述が載るという結果をもたらしたのである。また、この高まりを促がした、たたら研究会（広島大学考古学研究室内）の長年の功績がある。最近では産業考古学会鉱山金属分科会（東京農工大学繊維博物館、金子六郎研究室）の活動もある。こうした研究活動の活発化は、土地開発が進むにしたがって、それにとまらぬ緊急発掘調査過程のなかで、西日本以外の地でも製鉄の遺跡や遺物が注目されはじめる、ということにつながったのである。

そうした成果をふまえた集約が、穴澤義功氏によってなされている。⁽⁴⁾それによると、西日本以外では、北陸（福井、石川、富山各県）地方、関東（千葉、茨城、群馬、埼玉等各県）、東北（福島、宮城、岩手等各県）地方、そして、北海道にも製鉄遺跡の分布がおよんでいる。すなわち、「古墳時代後期に西日本の一部で開始された鉄の生産は、奈良・平安時代にかけて遺跡数の飛躍的な増加と空間的な拡散期に入り、わが国の広い範囲で行われた。」と穴澤氏は指摘する。⁽⁵⁾製鉄開始時期やその広がり時期に関する異議論はあろうが、ともかく、古代社会における製鉄の意義は共同体成立過程においてきわめて高い。それは、製鉄過程が諸個人のなせるいとなみではなく、組織だった集団のいとなみを必要とするからである。また、そのみならず、鉄器の活用範囲の広さが青銅器のそれをはるかにしのぐことにも一因している。つまり、農耕生活という労働対象にはたらきかける労働手段の軸が、鉄器と考えられるからである。とすれば、製鉄の遺跡とともに遺物もそれなりに評価してよいのではないか、ということになる。もっとも古代社会における金属器は、多くが祭祀の道具でもある。鉄器がただちに労働手段になるわけではない。しかし、こうした遺物の分布が生産手

段の自生的活性化の分布として把握することを、可能性としてのこしているように思うのである。

たしかに中世にかけて、全国的には製鉄は自給自足の地域経済圏の中にあった。社会的分業が展開し、局地的市場圏が形成していく過程は、わが国では鎌倉時代に相応しえよう。そのころになって、中国山脈ぞいの砂鉄を原料とした製鉄業がひとつの「農村工業」として生成してくるのである。⁽⁶⁾さて、以上の議論をふまえながら、わが大学が位置する長野県をみとみることにする。先にしめした北陸、関東地方等にあるような製鉄遺跡・遺物があるのだろうか。もし、あるとすれば、それらはどのように分布しているのか、そして、分布が得られたとしても、その分布をどう評価していけばよいのか、などという諸問題がつつぎつついでてくる。

残念ながらこの小稿ではそれらの疑問にお答えする用意も能力もないが、その疑問を解く手がかりになる俯瞰図をここではえがいてみたいと思う。そして、その俯瞰図は、『長野県史 考古資料編』（長野県史刊行会 1980年）に主としてとづいている。⁽⁷⁾また、岡田正彦氏の「平安時代の鉄製用具と小鍛冶遺構小考—特に中南信地方住居址出土遺物を中心として—」（『中部高地の考古学』II 1982年）は、長野県の製鉄遺跡を語る唯一の文献といってもよく、本小稿もまた、その思恵を多大にこうむっている。

注

(1) 窪田蔵郎『鉄の考古学』p.55~67 雄山閣 1973年 森浩一、炭田知子「考古学から見た鉄」（森浩一編『鉄』社会思想社 1974年）考古学の立場からの文献が多いのは当然であるが、最近でた主な2点をつぎにしめす。潮見浩『東アジアの初期鉄器文化』吉川弘文館 1981年 石部正志「技術の発生と伝播・定着」（三浦圭一編『技術の社会史1』有斐閣 1982年）とくに、潮見氏の前掲書 p.281以下を参照されたい。

(2) 窪田 前掲書 p.54~56 山本博『古代の製鉄』学生社 1975年 本書は製鉄起原についてさまざま仮説をたてた問題提起の書でもある。藤田等、田辺昭三「弥生時代鉄器鉄滓出土遺跡地名表」（『たたら研究』第4号 1960年）川越哲志「鉄および鉄器生産の起原をめぐって」（『たたら研究』第10号 1968年）村上英之助「弥生時代鉄生産の始期について」（『たたら研究』第18号 1974年）

- (3) 潮見浩「わが国古代における製鉄研究をめぐって」
 (『日本製鉄史論』たたら研究会 1970年) p.168
 (4) 穴澤義功「鉄生産の発展とその系譜」(『日本歴史
 地図』下巻 柏書房 1982年) 長谷川熊彦「南関東地
 方における古代鉄器及それ等の製造に関する研究」
 (『たたら研究』第13号 1966年)

- (5) 穴澤 前掲論文
 (6) 向井義郎「中国山脈の鉄」(『日本産業史大系』7
 中国四国地方篇 東京大学出版会 1960年) 拙稿「中
 国地方の諸鉄山」(『現代日本産業発達史IV 鉄鋼』交
 詢社 1961年)
 (7) 以下「長野県史 考古資料編」を『県史』と略す。

(3)

まず第1表をみていただく。この表にしめされた
 数値は、鉄製品の個々の数ではなく件数でしめし
 た。発掘が比較的しやすい古墳群に鉄製品が集

まっているのは、当然かもしれない。奈良・平安
 時代の場合、自動車道の建設、宅地開発等によっ
 て発見された遺跡を緊急に発掘調査するという
 ケースが近年多いようである。そのため、数値の
 うえで古墳時代にくらべすくない結果になってい
 るのではないかと思われる。

第1表東北信地方出土鉄製品件数

	弥生時代		古墳時代		奈良・平安時代	
	北信	東信	北信	東信	北信	東信
鉄 鏃			42	44	1	5
鉄 鈍			2		1	
刀 子			12	15	3	5
直 刀			49	29		
鉄 釧	1			2		
鉄 劍			10	4		1
鉄 環			1		1	
鉄 槍					1	
矛			2			
鉾			2			
鐔			3	1		
鐔			1	2		
甲 冑			1			
馬 具			10	11		
鉄 器	1		3			1
鉄 斧	1		3		3	1
鉄 釘			3	1	4	4
鎌			3	2		3
鋸			1			
鋏			1			1
鋤			1			
釜					2	
鉄 鐘						1
その他鉄製品			3	2	5	
鉄製紡錘車						2
鑿			1			

第2表奈良・平安時代の鉄製品

	東北信地方	中南信地方
鉄 鏃	6	23
鉄 鈍	1	1
刀 子	8	28
直 刀		1
鉄 釧		
鉄 劍	1	
鉄 環	1	
鉄 槍	1	
矛		
鉾		
鐔		
甲 冑		
馬 具		4
鉄 器	1	
鉄 斧	4	
鉄 釘	8	4
鎌	3	16
鋸		14
鋏		1
鋤	1	2
釜		2
鉄 鐘	1	
その他鉄製品		30
鉄製紡錘車	2	15
鑿		2

(注)【県史】p.17~267より作成。鉄器には鉄器片を、鉄斧
 には斧頭を含む。馬具には轡が入れてある。また、「北
 原調査報告書」飯山市教育委員会 1980年、「周防畑遺
 跡」佐久市教育委員会 1980年によって補足した。

(注) 東北信地方は、第1表による。中南信地方は岡田氏
 前掲論文 p.211より抜粋し、作成した。

したがって、中央自動車道の建設がすすんだ中南信地方では、そのために緊急発掘調査もあったようである。そうした成果をふまえて先の岡田氏の労作がある。第2表は、岡田氏がしめした出土点数を比較のために件数になおして作成した。中南信地方の「その他の鉄製品」の中には、「縫針」もふくめている。この表をみるかぎり、中南信地方の発掘調査がすすんでいると考えられるが、東北信地方にくらべ総体的に多いのはそれなりの理由がある。すなわち、製鉄に必要な自然条件が中南信地方によりそなわっていたと考えられるのである。

先にものべたように、古墳時代の出土鉄製品は、その多くが副葬品である。そのためでもあろうか、出土する鉄製品は武具ないしは、権威を誇るような遺物が目につくのである。第1表をふりかえてみる。鉄鏃はやじりであり、刀子はいろんな細工ができる小刀であり、いわば日常生活の用具と考えられる。それにひきかえ、直刀、鉄剣、矛、鏑、甲冑、馬具は非日常的な権威の象徴ともいえる遺物である。

他方、鉄斧、鉄釘、鎌、鋸、鋏、鋤などはもちろん日常生活、農耕生活に欠かせぬものばかりである。その点を頭にいれながら第1表をみると、古墳時代の出土遺物が比較的多く権威の象徴にむすびついていることがわかる。逆に、奈良・平安時代では、日常、農耕生活に類する遺物が目につくのである。中世の特色ともいえる。

その点をさらに鮮明にしめしてくれたのが第2表である。岡田氏の論文によると、ここでの中南信地方は、ほぼ南信地方をさしている、と考えてよい。すなわち、諏訪、岡谷、塩尻各市から南下して、箕輪町、伊那市、飯田市へと展開しているのである。また、国道20号線沿いの茅野市、原村、富士見町と東の方面にも展開している。そして、その展開の内容をみてみるともっぱら日常生活、農耕生活関連の鉄製品が多く出土していることがわかるのである。すなわち、第2表の中南信地方をみると、釘、鎌などはもとより鉄製紡錘車などが多く出土しているのである。したがって、このような点からも奈良・平安時代の農業生産力の発展が製鉄業、鉄加工業（小鍛冶）の展開とふかかかわっているように思われるのである。「たたら

製鉄」以前は、野鑪（鑪のかわりに炉という字をあてることがある）といて、斜面地で下からの自然風および革製の手押し鞆を使って送風し、原料鉄を溶かしていた。それで得た鉄をもう一度脱炭して得る作業を大鍛冶という。通常の鉄加工の鍛冶屋は、この小鍛冶をさしている。

第3表は、鞆羽口、鉄滓および製鉄炉が発見された遺跡数をしめす。先の第1表、第2表の件数もいふならば遺跡数をさしていることになる。鞆羽口とは、鞆から風を炉に送るためのもので、いふならば送風管のようなものである。羽口は炉に密着しているため、燃えない材質を使い、多くは粘土製のものである。鉄滓は「かなくそ」ともいうが、鉄を溶かしているとき、炉壁や炉底部に付着したりして十分に用をなさない残留鉄分のことである。したがって、製鉄炉の遺構がみつければ別であるが、鞆羽口、鉄滓があるからといって、そこで製鉄が営まれていたとはかぎらない。つまり、小鍛冶の遺構にも同様の条件があてはまるからである。しかし、いづれにせよ、製鉄関連の営みがあった、という根拠にはなる。

鞆羽口は、先にも述べたように粘土製が多いため、その原形がそっくりとどまってみつかるとはむずかしい。むしろ、鉄滓のほうがよくその形状をとどめていることが多い。第3表をみると比較的、鉄滓が数多く記されているのはそのためもある。この表をみると、第2表でみたように、中南信、とりわけ南信地方にその事例を多くみることができる。第2表の中南信地方は、実はほとんどが南信地方である。したがって、奈良・平安時代においては、南信地方により活発な製鉄の営みがあったことが推察されるのである。

第3表奈良・平安時代鞆羽口および鉄滓出土状況

	北信	東信	中信	南信
鞆羽口	7	3	3	12
鉄滓	4	5	16	43
製鉄炉	1			

(注) 北信、東信地方は『県史』、中信、南信地方は岡田氏前掲論文より作成。

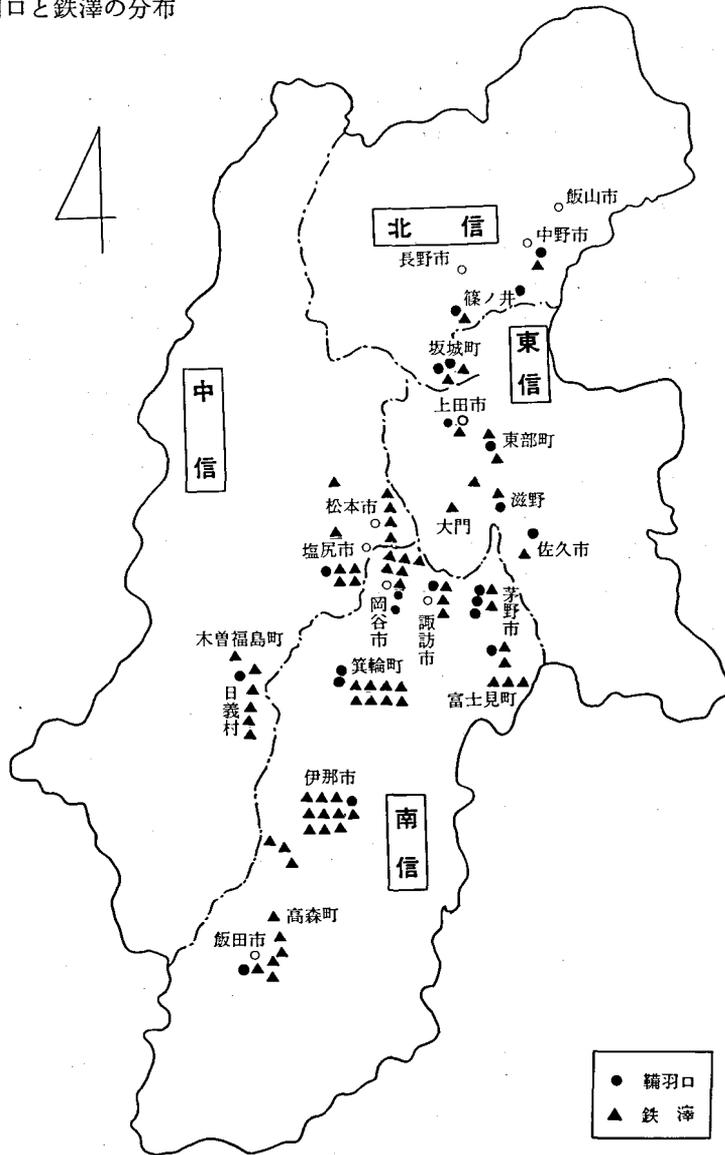
(4)

その点を形をかえてみてみよう。第1図は第3表が依拠した資料等にもとづいて作成したものである。つまり、この図は、奈良・平安時代を中心とした分布をしめしている。

さて、この図の北信地方の南に坂城町がある。「開闢製鉄遺跡」(坂城町教育委員会 1977年)によると、「製鉄炉底と思われる火床を3カ所確認で

きた」(森嶋稔 同 p.31)とある。翌1978年第2次調査がなされ(「第2次調査報告」)、「地元の伝承等を参酌すると」製鉄が稼業していたのは「室町～桃山期辺りと推定して」(窪田蔵郎 同 p.54)いる。そうだとすれば、中世から近世にかけて図にある東北信地方のとりわけ国道18号線ぞい—国鉄信越線ぞいでもあるが—に集中して製鉄が営まれていたと考えることができる。

第1図 韃羽口と鉄澤の分布



(注) 第3表と同じ。

また、東信地方では東部町が目される。太平寺遺跡はすでに発掘調査がおわり、韃羽口と鉄滓が報告されている。⁽¹⁾ところが、同じ東部町の和というところに韃韃堂という地名がある。その近くの畑の表土をすこし掘りおこすと数多くの鉄滓に今も出あう。が、いまだ発掘調査はおこなわれていない。土地に永く住んでおられる関実雄氏の案内によると、韃羽口らしきものもかつて出たそうである。東部町教育委員会の手による調査が待たれるところである。⁽²⁾

他方、上田市の西、塩田盆地を見おろす位置に塩田城跡がある。鎌倉時代、北条義政が築城、以降三代にわたって居館したところである。その後、室町、戦国時代にかけてさまざまな戦略基地として活用された複合城跡でもある。この城跡が上田市教育委員会の手で発掘調査がなされた。その結果、韃の羽口が14点、他に鉄滓が多数出土、採集された。⁽³⁾その「調査概報」では、それ以上のことはのべられていない。発掘地点が複合城跡であることを考慮すれば、「小鍛冶」の跡と思われる。しかし、製鉄加工がおこなわれていた、という根拠にはなるだろう。

いずれにせよ時代は下って中世から近世の遺跡および遺物である。古墳時代から奈良・平安時代にかけての製鉄遺物はいくつか確認されているだけに、それ以降の製鉄遺物が検出されるということは、これまで比較的等閑視されてきた長野県の製鉄史を知るうえで、とくに、製鉄の連続性を確認するうえできわめて意義のあるものといえよう。第1図の分布には、1～2中世の製鉄遺物も含めている。時代未確定のものもある。ともかく、この図から古代～中世の製鉄遺物の俯瞰が得られれば、と思う。

つぎに中南信地方に目をむけてみよう。ここでも現在の岡谷市、諏訪市から国道151号線一國鉄飯田線一にそって韃羽口と鉄滓の集中した分布が、東信地方以上にあざやかにみられる。天竜川ぞいの谷あい、原料、燃料である木材等も容易に得られたからであろう。

岡田氏は調査結果をふまえて中南信地方についてつぎのように述べている。「中南信地方平安時代住居址総数632軒中、羽口出土住居址は2.5%弱の15軒。鉄滓出土住居址58軒で全体の9.2%。羽口・

鉄滓・鉄製品及び砥石の四者を出土した住居址5軒、砥石を除く三者出土住居址3軒、羽口と鉄滓のみ出土住居址3軒となる。関東地方をはじめとする各地域で検出された平安時代の製鉄遺跡は当地方（中南信一筆者）では未検出であったが…略…羽口や鉄滓等が出土しているいわゆる小鍛冶遺構は、最近の発掘でいくつか知られるようになった。⁽⁴⁾」

たしかに製鉄遺跡の検出はなくとも、小鍛冶等の製鉄加工の分業はかなり東北信地方に比べその数からいってすすんでいるといってよい。そして、その背後に製鉄、それも「たたら製鉄」以前の野鑑形態のものが存在しうることを予測させる。

もっとも近世に入ると長野県における製鉄は、近世後期の大日向鉄山をのぞくとほとんど記録にはない。もっぱら山陰地方の鉄が、日本海を北上して新潟へ運ばれたり、瀬戸内から大阪、そして名古屋、飯田を通して長野へ入ってくると考えられている。⁽⁵⁾あるいは、中世の後期(13～14世紀以降)から山陰地方の鉄が入ってきたのかもしれない。ただ古代から中世にかけてはなお、長野県において製鉄がいとなまっていたのではないかと、いう可能性を強くのこしているように思えるのである。したがって、今後の調査研究による補充が、つよく望まれるところである。⁽⁶⁾

注

(1) 『県史』 p.150

(2) この点については、飯田賢一『鉄の語る日本の歴史』そして文庫 1976年でもふれている。また岡田正彦氏は「長野県更埴市屋代馬口遺跡調査報告」（『信濃』第23巻第5号 1971年）のなかで、平安時代の馬口遺跡を紹介しておられる。このなかで氏は「鉄鈹は金工具としての機能を有するが、フイゴや鉄滓などの積極的遺物の伴出がなく工房址を予測するのが困難である。」(同 p.67)と述べられている。日常的な鉄器(他に鉄鎌など)が検出されているにもかかわらず、この遺跡には製鉄遺構がみられないという。「たたら堂」とは逆の現象がうかがわれる。

(3) 「塩田城跡」第3次発掘調査概報 上田市教育委員会 1978年

(4) 岡田正彦 前掲「平安時代の鉄製用具と小鍛冶遺構小考」 p.221

(5) 宮下史明『信濃の鋳物師』1964年 p.80～81

(6) 今年(1982年)9月、諏訪市の宮坂光昭氏の案内で、同市岡村で平安初期の小鍛冶の跡と思われる遺構をみた。諏訪地方にはこうした遺構が他にも未調査のところであると推測される。

後記

この小稿が成るにあたって、岡田正彦氏、桐原健氏、塩入秀敏氏に御教示、御世話になった。記して謝する次第である。また、昭和56年度の本学地域調査研究費を本研究に充当したことを併せて記する。